

亀山市名誉市民

彫刻家
中村 晋也
Shinya Nakamura

作品紹介
ふるさとあい
Vol.126

「虹」

平成19（2007）年

枯葉を焼く煙の匂いや、澄み渡った彼方（かなた）の空から聞こえてくるカラスの鳴き声。そんな秋の情景は今もどこかにあるのでしょうか。里芋の葉っぱを傘がわりにして、にわか雨の中を走って遊んだのも、遠い日の思い出の中。ふいに現れた雨上がりの虹は、遠くの山々をまたいで子どもの夢を乗せているようです。

子ども時代に想像した未来にAIはあったでしょうか。ノスタルジーあふれる作品からは、古き良き頃の日本がよみがえってきます。



（高さ）35cm ×（幅）14cm ×（奥行）13cm
中村晋也美術館

特別協力　公益財団法人 中村晋也美術館　https://www.ne.jp/asahi/musee/nakamura/

まちかど キラリ

一本の糸から広がる支え合いの輪

亀山親なきあとを考える会つむぐ



令和4年に設立された市民活動団体。障がいのある人が「親なきあと」も安心して暮らせる地域づくりを目指し、月に1度の運営会議を開催。偶数月には運営会議後に当事者や家族のための交流の場「つむぐタイム」を設け、情報や経験を共有。互いに支え合えるつながりを育み、一人ひとりが将来への安心感を高められる場づくりに取り組む。

一本では弱い糸も、何本もの糸が織り重なることで強く温かな布になる。団体の名前には、多様な思いをつなぎ、人と人との支え合いを育みたいという願いが込められています。活動の原点にあるのは、障がいのある子どもを持つ親が抱える「親なきあと」への不安。「自分がいなくなった後も、我が子は地域で安心して暮らしていけるだろうか」。そんな思いを一人で抱え込まず、同じ悩みを持つ人同士がつながり、学び合える場をつくろうと活動を始めました。

現在は、定期的な勉強会や交流会「つむぐタイム」を開催し、安心して思いを語れる居場所で、当事者や家族が悩みや将来への不安を分かち合いながら、支え合う関係を育んでいます。こうした活動を通して見えてきたのは、地域全体で障がいへの理解を深めることの大切さでした。「親なきあと」の不安を和らげるには、地域に理解者が増え、支え合える環境が欠かせません。そうした思いから、市と協働して準備を進め、今年度から「障がい者サポーター養成事業」を開始しました。

この事業では、障がいを個人の問題ではなく、社会や環境にある障壁として捉える「社会モデル」を学ぶ講座や、当事者とサポーターが交流する機会を設けています。一本の糸から始まった「つむぐ」の活動は、人と人とのつながりを広げながら、誰もが自分らしく暮らせる地域づくりを目指しています。



「困っている人に声を掛けられる人が一人でも増えれば、亀山はもっとやさしいまちになるはず」。それが、「つむぐ」の思いです。

「つむぐ」の活動に興味がある人は、メールでお問い合わせください！
✉ oyatumugu@gmail.com